プロチノスの素材論、その一

——知的素材と愛——

田之頭安彦

エンネアデスの第二論集、第四論文における「知的素材 ὕλη νοητή」の教説は、プロチノスの思想体系のなかで特異な地位を占めると考えられているだけに、今日でも多くの学者によって、いろいろな解釈が加えられている。(1)

たとえば、フゥラーはこれを、①知性界における統一性（もしくは単一性）の原理であるとともに、②一者、ヌース、プシュケー間における不完全性の原理でもあるとし、(2) アームストロングは、フゥラーのこの見解に同調しつつも、更に、③プロチノスは知的素材を「無限定なる二」（もしくは τὸ ἄπειρον）と同視し、これに「一者による限定」という考えを適用することによって、一者とヌースとの関係に、比喩的な流出説よりも満足しうる説明をあたえようとした、という新しい解釈を打ち出している。(3)

なお、わが国では、松山商科大学の水地宗明氏が、②と③についてはフゥラーらの見解に同調しているが、①については、知的素材はイデアの多数を説明するために導入されたと解することによって、彼らに反対する立場をとっている。(4) だが、いずれにせよ、この三氏は、「知的素材の役割は後期の作品においても維持されている」と考える点で、ともに同じ立場にたっているとみなすことができよう。

しかし、これに対立する人びとの見解も今日なお有力である。すなわち、ギャスリイ、ハイネマン、マーランらの見解がそれで、彼らは、「知的素材という考えはプロチノスの一般的な思想傾向からそれている」という見解を基礎とし、そこから、「この知的素材は中期以降の作品からは姿を消し、アリストテレスの可能態と現実態、および可能態にあるものの完成としてのエネルゲイアという考えが、これにとって代わった」と断じていくのである。(5)

ではどうなのであるか。はたしてギャスリイらのいうように、知的素材という考えはプロチノスの一般的な思想からそれていて、彼の中期以降の作品からは姿を消していったのであるか。それともアームストロングらの考えるように、それは中期以降の作品においても、何らかの役割をはたしているのであるか。もしそうだとすると、その役割は、彼らの主張する四つのみに限られるのであるか。ほかに、もっと重要な役割があるのではないか。

このような知的素材の問題は、プロチノス哲学の一面を明らかにする鍵として、今日でも、いろいろな角度から検討されているが、まだ論争に終止符を打つような解答はだされていないように思われる。そこで筆者は、この論文において右の問題を検討し、その解決を通して、可能な限りプロチノス哲学の中核に迫ろうとした。しかしそのためには、混乱を避けるべく、まず、誰も異論をはさむ余地のない初期の作品のなかで知的素材の役割を明確に規定し、そのうえで、中期と後期の作品にはいっていく必要がある。(6) したがって、この論文は四部にわけられ、一部で初期の作品における知的素材の役割が規定されたのち、二―三部で、その知的素材の役割が中――後期の作品においても維持されているかどうかが吟味され、そして四部において、この知的素材の役割に関連しつつ、プロチノス哲学の一つの特色が浮き彫りにされるよう、特に配慮が払われた。

(1) プロチノス哲学の骨子となっているのは、周知のように、一者とヌース、プシュケーと素材であって、これらの問題は、前期、中期、後期の別を問わず、数多くの論文において、繰り返し詳細に論じられているのである。しかしその内容は、前期と後期の作品の間でも、さして大きな違いはないので、一見、くどくどしいという感じがしないでもない。だが、この同一の

問題にたいする再三の論述というものも、彼の論文が或る特定のテーマに拘束されずに書かれたもので、その関心はすべて、一者とその認識にむけられていた、という事実から考えるならば、むしろ当然のことと言えるであろう。なぜなら、ヌースとプシュケー、そして素材は、一者認識の行程において、それぞれ重要な役割をはたすと考えられるからである。もしそうだとすると、しかし、ここに別の問題がおこってくる。すなわち、知的素材の問題がそれである。この問題は、彼の初期の作品（第二論集の第四論文）ではくわしく吟味され、かなり重要な役割があたえられているにもかかわらず、中期や後期の作品では、一見したところ、ヌースや素材にくらべて、さほど重視されていないようにも見えるのであって、ここに、本論で紹介するように、知的素材という考え方そのものに疑問をはさむギャスリイや、ハイネマン、マーランらの見解が生まれてくるのである。

(2) B. A. G. Fuller; The Problem of Evil in Plotinus, 1912, 283〜293.

(3) A. H. Armstrong; The Architecture of the Intelligible Universe in the Philosophy of Plotinus, 1940, 66〜68.

(4) 関西哲学会紀要、第五冊。本誌の中で水地氏は、ハイネマンやマーランらの見解と、知的素材の歴史的背景に触れ、結論として、「プロチノスにおいては、アリストテレスと違い、ヌースは最高のものではない。故にヌースが最も完全なるものである一より劣る理由が与えられなければならない。イデア素材（＝知的素材）はこの役目を果す。即ちイデア素材はイデアの多と、イデア相互の異りとを説明し、またまだ見ぬヌースとして、イデア界の生成と性質とを描くためにも用いられた。」と述べている。ただ本誌は、研究発表のレジュメといったような形式をとっているので、氏の詳細な論述を知ることができないのは、残念である。

(5) K. S. Gutherie; Plotinus, Complete Works, 1918, 1296〜1297.

F. Heinemann; Plotin, Forschungen über die Plotinische Frage, Plotins Entwicklung und sein System, 1921, 164, 174〜176.

P. Merlan; From Platonism to Neoplatonism, 1960, 125〜126.

(6) ポルピュリオスのプロチノス伝（四―六）によると、プロチノスはガリエヌス帝治世第一年目から十年の間に二十一篇の論文を書き、次にポルピュリオスが彼に師事していた六年の間に二十四篇の論文を、そしてポルピュリオスのシケリア時代以降には九本の論文を書いたようである。いまこれらの時代を初期、中期、後期とし、そのそれぞれに、ポルピュリオスの報告にしたがって論文を配列していくと、次のようになる。なおI・6となっているのは第一論集の第六論文をあらわし、他も同

様である。

初期の作品
I・6、IV・7、III・1、IV・2、V・9、IV・8、V・4、IV・9、VI・9、V・1、V・2、II・4、III・9、II・2、III・4、I・9、II・6、V・7、I・2、I・3、IV・1。

中期の作品
VI・4、VI・5、V・6、II・5、III・6、IV・3、IV・4、IV・5、III・8、V・8、V・5、II・9、VI・6、II・8、I・5、II・7、VI・7、VI・8、II・1、IV・6、VI・1、VI・2、VI・3、III・7。

後期の作品
I・4、III・2、III・7、V・3、III・5、I・8、II・3、I・1、I・7。

一

プロチノスの知的素材にたいする考えを知るためには、まず、エンネアデスの第二論集に収録された『二つの素材について』という小論に目を通していかねばならない。(7)

この論文は、その表題の示す通り、主として知的素材と感性的素材(8)をとり扱ったもので、全部で十六の章からなっているが、プロチノスはその四章で、知的素材があるということの証明として、次のように述べている。

「もしイデアが多であるとすると、それらのイデアのなかには、どのイデアにも共通な或るものがなければならぬし、それからまた、イデアとイデアを区別する固有な或るものもなければならぬことになる。ところで、各イデアに固有なもの、つまり或るイデアを他のイデアから区別するディアフォラは、それぞれのイデアに固有なモルフェーである。だが、モルフェーがあれば、それによって形作られるもの……もあることになる。したがって、そのモルフェーを受け取るものとしての素材、いつの場合にもそのモルフェーの基体となるもの（τὸ ὑποκείμενον）としての素材も

あることになる。それからまた、もし彼方に知的な世界（κόσμος νοητός）があり、この世界はあの世界の模像で、この模像の世界は素材との結合によってできているとするならば、あの知的な世界にも素材がなければならないことになるだろう。それに、あの世界をコスモス（美しく飾られ秩序づけられた世界）と呼ぶのは、その形（εἶδος）を眺めたうえでのことであるし、形があるのは、その形の基となっているもの（すなわち素材）があるからなのである。なるほど、たしかに知的な存在は、いかなる点においても不可分であろう。だが、或る意味では可分なのである。そして知的な存在の諸部分が互いに切り裂かれた時、その切ったり裂いたりする作用を受けるのが素材なのである。なぜなら、切られたのは素材だから。だが、これにたいして、『知的な存在は多であるが不可分なのだ』という場合には、その『多』は『一なるもの』のなかにあることになるのだが、それはとりもなおさず、『一なるもの』としての素材のなかにあることなのであって、その時の『多』は『一なるもの』のモルフェーなのである。なぜなら、その『一なるもの』が多様性すなわち数多くのモルフェーを持っているのだと考えねばならぬからである。だが、もしそうだとすると、その『一なるもの』は多様性を持ったものとなる前にはモルフェーのないものだった、ということになるだろう。なぜなら、君のその考えのなかから、多様性つまりモルフェーやロゴスやノェーマを取り去っていくと、それらが加えられる前のものは、モルフェーのないものつまり無規定なるもの（τὸ ἀόριστον）となり、その上にも中にも、何もなくなってしまうだろうから。」(9)

知的素材があるということの証明として述べられたこの文章のなかに、われわれはその知的素材の役割に関する言及をも読み取ることができるので、四章のほぼ全文にわたって引用してみた。

そこでいま、知的素材の役割ということに焦点をしぼって、この引用文をまとめてみると、次のようになる。すなわち、「モルフェーが或るイデアを他のイデアから区別するディアフォラとしての働きをするのにたいして、知的素材はどのイデアにも共通な要素としての働きをする。つまりイデアが多であると言われるのは、それぞれのイデアが

異なったモルフェーを持っているからだが、それらのイデアは、どれもみな共通な或る一つのもの、すなわち知的素材を基礎として成り立っているので、その限りでは、すべてのイデアは同じ一つのものであるとも言える。そしてこのことは、少し観点をかえて、『イデアは多であると同時に不可分である』と考えても、やはり同じである。なぜなら、その場合には、イデアの多としてのモルフェーが一なるものとしての知的素材のなかにあることになるのだから。したがってイデアはモルフェーによって多となり、知的素材によって一となる」と。そして、もしこのとおりだとすると、ここにわれわれは、各イデアに共通な一つのものとしての知的素材、多なるイデアがそれによって一つのものとなるところの知的素材、つまりフゥラーの指摘する「イデア界の統一性または単一性の原理」としての知的素材を見ることができるであろう。(10)

なお引用文の終りの箇所に注意していただければ、すぐに分かることだが、「知的素材がイデア界の単一性の原理たりうるのは、あくまでもモルフェーによって限定された場合のことであって、それまでは、知的素材は『無限定なるもの ἀόριστον』にすぎず、したがってその役割をはたすことはできない」ということを、ここに附記しておきたい。もっとも、知的素材が無限定である時には、まだイデアは生じていないので、これは至極当然のことではあるが。(11)

さてプロチノスは、知的素材があるということの証明として右のように述べたのち、次の五章では知的素材の生成に関連して、以下のように述べている。

「ところで、知的素材が永遠であるかどうかの問題は、イデアを探究するのと同じ方法で、探究されねばならない。なぜならイデアも知的素材も、その始め（ἀρχή）を持っている点では生成せるものであるが、時間の中に始めを持つのではなく、常に自己以外の或るものから生じているという点では、むしろ生成せるものではないのだから。つ

まりそれは、この感性界がそうであるような意味で絶えず生成しているのではなく、むしろあの知性界がそうであるように、常に在るのである。なぜならあの知性界のヘテロテース（ἑτερότης ἡ ἐκεῖ）は永遠で、それが知的素材を作るのだから。というのもこのヘテロテースが知的素材の始め（ἀρχή）だからであるが、それはまた第一の動でもあるので、それで第一の動はまたヘテロテースでもあると言われたのである。なぜならこの動とヘテロテースはともに同じところから生じたのであるから。[12] で、一者から生じたこの動やヘテロテースは、ともに無限定なるものであって、限定されるためには、かの一者を必要とする。そしてその方へ向きをかえると、限定されるのであるが、それまでは知的素材も無限定で、τὸ ἕτερον であって、まだ善いものではなく、あの一者から照らされていないものなのである。なぜなら光が一者からくるとすると、その光を受け取るものは、それを受けとるまでは光をもっていないのが常であるし、いやしくもその光を自分以外のものから受け取る以上、自分は、それとは別のものとして、光をもつことになるのだから。[13]」

この文章を先に引用した四章の内容に関連させて考える時、われわれはプロチノスのイデアつまりヌースについて、「彼のモルフェーというのは実は一者から輝き出る光のことなのだから、イデアがモルフェーと知的素材からなっているということは、ちょうど鏡に光があたっていろいろな像を映しだすように、無色透明でとらえどころのない（＝無限定な）鏡としての知的素材に一者の光が照射され、[14] そこに一者みずからの多様豊富な内容が具現されてイデア[15]つまりヌースとなるということにほかならない」という事実を知ることができよう。そしてこのように解する時、「多様性の原理としてのモルフェーと、同一性の原理としての知的素材」ということばの意味も、いっそうはっきりとしてくるのではなかろうか。なぜなら、その場合の光、つまり一者の多様豊富な内容が、四章に述べられているモルフェーであり、そのモルフェーを受けとめてただひとつのイデア界（＝ヌース界）を成立せしめる基となっているのが、知的素材だからである。

だが、もしそうだとすると、同じ五章の引用文には、別に、「知性界にある ἑτερότης が知的素材の ἀρχή である。そしてこの ἑτερότης は無限定で、一者の方へ向きをかえると限定されるのだが、それまでは知的素材も無限定で τὸ ἕτερον である。」ということばもあるので、この τὸ ἕτερον をどのように解するかによって、フィラーラの指摘するように[16]、「知的素材は知性界における同の原理だったのに、ここでは異の原理（つまりイデアの多の原理）でもあるようになっている。これは矛盾しているのではないか」という疑問もでてくる。だが、はたして矛盾しているのだろうか。いや決して矛盾してはいない。それはなぜか。われわれはこの問題を明らかにするために、別の観点に立って、一者と ἑτερότης と τὸ ἕτερον の関係を、もう少しくわしく検討してみる必要があるだろう。

プロチノスの一者は、プラトンのパルメニデス篇、第二部、第一仮定の解釈に基づくところが大きく[17]、そこに述べられている τὸ εἶ の否定的な面の影響を強く受けているのであって[18]、第六論集の第九論文では、彼の一者は「万有のいずれでもなく、またヌースでも魂でもなく、場所の中にも時間の中にもない」と規定されている[19]。つまり彼の一者はわれわれの考えうるいかなるものでもないのだが、この「ない」ということは「τὸ ἕτερον である」ということを前提とし、それはまた「異なり」つまり ἑτερότης を前提とすることによってのみ可能となるのだから、一者は当然、何らかの意味で、この「異なり」を自分の中にもっていると考えねばならない。そしてその「異なり」の外面化・具現化（ἐνέργεια）が先の引用文の ἑτερότης であり、知的素材はそこから生まれてきたのであるから、これもまた当然のこととして、「τὸ ἕτερον である」と言われているのである。しかしまだヌースは生まれていないのであるから、それはヌース相互の異なりや多様性を説明するための τὸ ἕτερον ではなく、「一者と異なっているもの」という意味でのそれにならざるをえないのであって、やがて一者の光つまりモルフェーが知的素材と結合してヌースとなる時、それは一者とヌースとの異なりを説明する「異の原理」となるのである。で、もしこのとおりだとすれば、知的素材は

ヌースとヌースとの間では「同の原理」となり、一者とヌースとの間では「異の原理」となるのだから、そこには何らの矛盾もないことになる。

さて、このようにしてわれわれは、一者とヌース間の「異の原理」としての知的素材の役割を見てきた。しかしこれで問題のすべてが解決されたわけではない。先の五章からの引用文では ἑτερότης＝πρώτη κίνησις とし、この πρώτη κίνησις を知的素材の ἀρχή と見なしているので、これが何を意味しているのか、もっと検討していかなければならないからである。では、πρώτη κίνησις が知的素材の ἀρχή であるというのは、どういうことであるか。われわれはこれを知るために、また別の観点から一者と知的素材の関係を見ていく必要がある。

プロチノスの一者はたしかに万有のいずれでもないのだが、また同時に万有の ἀρχή でもあり、万有を生む者でもあるのだから、何らかの点で万有でもあることが必要となってくる。[20] ではいったい、どの点において万有でもあるのか。「万有を生むことのできる力（δύναμις）である」という点においてである。[21] つまりプロチノスの一者は、「いかなる存在でもない」という点では万有ではないのであるが、「万有を生むことのできる力である」という点では万有でもあるのであって、この「万有を生むことのできる力」⟶「はかり知ることのできない力」⟶「捉えられない力」⟶「限りない力」というところに強調点がおかれる時、彼の一者はまた、「無限なるもの τὸ ἄπειρον」としての自らの姿をあらわしてくるのである。[22]

さて、この一者のこの無限性から、やはりまた「無限なるもの τὸ ἄπειρον」としての知的素材が生まれるのであるが、知的素材との関連のもとに考えられた無限性は一者の産出したものであるから、もはやそれは、一者そのものの無限性と同じではない。[23] 一者が無限性を産出する時、つまり一者のなかに秘められた無限性の外面化（ἐνέργεια）がおこなわれる時、同時にまた無限性にたいする価値の転換もおこなわれ、一者の偉大さをあらわした無限性は、文字通

りに、「限りをもたぬ」⟶「不足分のある」⟶「十全でない」という不完全さをあらわす ἀπειρία・ἀοριστία へと変わっていくのである。そして不完全で無限定であるからこそ、それはまた一者との訣別を告げる ἑτερότης となり、一者によって限定されんと欲する κίνησις となるのでなって、この場合には、ἀπειρία＝ἑτερότης＝πρώτη κίνησις という等式が成り立つから、ἀπειρία が知的素材の ἀρχή であれば、πρώτη κίνησις も知的素材の ἀρχή であることになるのである。

それゆえ、知的素材が無規定性と不完全性をあらわす ἀοριστία をその本質としている以上、これを構成要素とするヌースが一者にくらべるとそれだけ不完全で無規定的な面をもっているのは至極当然なことであるし、それにまた、知的素材は πρώτη κίνησις をもその本質としているのだから、ヌースが限定されようとして一者へ向かうのも、また当然のことである。そしてこの場合には、ヌースの不完全性の原因と完全を求めて（欲して＝ἔφεσις）一者へ向かうこと（κίνησις＝νόησις）の原因となっているのが知的素材であることは、明らかな事実なのである。で、もしそうだとすると、ここでは、知的素材は主として、「ヌースの不完全性の原理」と「一者にたいする ἔφεσις（νόησις）の原理」という二つの役割をはたしていることになる。

以上、第二論集の第四論文をもってプロチノスの初期の作品を代表させながら、知的素材の役割を検討してきた。これをまとめて箇条書きにすると、次のようになる。

① 初期の作品に見出される知的素材は、ヌースの単一性の原理である。

② それは、一者とヌースとの異なりを説明する異他性の原理でもある。

③ それはまた、ヌースの一者にたいする不完全性の原理でもある。

④ したがってそれは、ヌースの一者にたいする ἔφεσις と κίνησις（νόησις）の原理でもある。

（7） ポルピュリオスの伝えるところによると、プロチノス自身は自分の作品に題名をつけるようなことはしなかったらしく、

ここに紹介した『二つの素材について』という表題も、当時においてもっとも広く知られていたものを、ポルピュリオスが採用したものである（伝四）。このようにプロチノスの論文表題については確定的なものがなく、このⅡ・四についても、H—R. Schwyzer や A. H. Armstrong などは、Pinax, Summarium や Enn. I. 8. 15. 2 などに根拠をおいて、その表題を *ΠΕΡΙ ΥΛΗΣ* としている。しかし、明らかにⅡ・四は二つの素材を取り扱っているのであるから、別に表題を改める必要もないように思われる。

(8) プロチノスが通常、「素材」という場合には、感性界にある素材のことを指し、特に「感性界にある……」とことわるようなことはしない。だがⅡ・四においては「知性界にある素材」もしくは「永遠なる領域にある素材」のことも取り扱っているので、これと対称して、「感性界にある素材」もしくは「生成の領域にある素材」とことわっている。

(9) Enn. II. 4. 4, 2～20.

(10) 註(2)と(3)を参照。なお知的素材をイデアの単一性の原理とする考えは、プロチノス哲学になじみのない者にとっては奇異に感じられるかもしれないが、別に奇異なことではなく、ごくあたりまえのことなのである。引用文にもあるとおり、プロチノスは感性界を知性界の模倣であると考え、——これは彼の考え方の一つの特色であるが——そこから知的素材の存在を証明しようとしているので、ここでも、このような彼の考え方に従い、感性界の事物に例をとって考えてみよう。

ここに机があるとする。その机は一つではあるが、多様な形・モルフェーを持っている。すなわち、その机の表面は長方形と半円形の組み合わせ、側面は正方形、脚は長方形と正方形の組み合わせからなっていて、それぞれの形には大小の違いがあり、木目にも直線に近いものや波形、円形などがある。つまり、その机は一つではあるが、同時に円形、波形、長方形、正方形、そして大きい形、小さい形など、多種多様の形から構成されているのであって、その多様性の原因となっているのは、いうまでもなく、その机の面や脚の形姿（モルフェー）なのである。では、その机は、多様なモルフェーからなっているにもかかわらず、どうして一つなのであるか。素材としての木材が、円や四角形などによって区切られながらも、ばらばらに四散してしまうのではなく、一つの共通な素材として、机をなしているからである。つまり、その机の多様性の原因は、円、半円、正方形、長方形などという机の持つ形（モルフェー）であり、単一性の原因は、一つの共通な素材としての木材なのであって、この日常生活の事物に見られるようなごく簡単なことを、プロチノスはイデアの構成要素としてのモルフェーと知的素材についても、考えているにすぎないのである。

(11) 先の例にならって、一つの机を考えてみよう。その素材は木材であるが、木材のままでは、まだ「一つの机」ではない。

その素材としての木材が机全体の形姿（モルフェー）によって限定される時、はじめて「一つの机」ができあがるのである。イデア界というものも、これに似ていると考えてよいだろう。はじめに知的素材があったのであるが、一者の光のとしてのモルフェーによって限定されるまでは、まだ一つのものでもイデアでもなく、文字通りに、無限定なるもの（τὸ ἀόριστον, τὸ ἄπειρον）にすぎないのであって、プロチノスが同じ論文で、「この神的な素材は、それを限定するものを受け取ると、限定されて知的な生を持つ（すなわちヌース、イデアとなる）」（五章）と述べているのも、このことを意味しているのである。

(12) 「一者から同時に生じた」ということ。

(13) Enn. II. 4. 5, 24～37.

(14) 素材を「映像をうつしだす鏡」とするプロチノスの考えについては、第三論集の第六論文（『肉体なければパトスなしということについて』）、七章、十三章、十四章などを参照されたい。

(15) プロチノスはアリストテレスの δύναμις と ἐνέργεια の問題を受けついで、これを自己の思想体系の中に取りいれているが、アリストテレスでは「可能態においてあるもの」の現実化（発現、具現）としての「現実態においてあるもの」の方に優位があたえられているのにたいし、プロチノスにおいては、田中美知太郎教授も指摘されておられるように、「現実の作用や活動よりも、それらの作用や活動の能力……の方が、それのもとにある根本者として、かえって優位におかれている」（『善なるもの一なるもの』、九七頁の註四七）のである。したがって、このような考えによると、ヌースは一者の、ブシュケーはヌースの、それぞれエネルゲイア（発現、具現）であり、すべてのものは一者の発現であって、万物の根元者たる一者は、すべてのものを、その可能態において含み持っているもの、つまり「万物のデュナミス」である、ということになる。

(16) B. A. G. Fuller: op. cit. 280. A. H. Armstrong: op. cit. 67-68.

(17) たとえばプロチノスは、第五論集の第一論文、第八章で、プラトンの善と知性と魂との関係にたいする考え方を説いたのち、「それから、またパルメニデスも、もっと前の時代において、存在と知性をひとつに結びつけようとして、存在を感覚されるもののうちにおこうとしなかったところからすれば、同上の思想に到達していたわけである。すなわち『直知するものも、存在するものも同じだ』というのが、彼の言葉であり、存在の不動を説くにあたっては、これに直知作用を附加容認してはいるけれども、いっさいの物体的な運動は、これを存在から取り除いて、存在が同一の有様に止まるようにしているのである。また彼は、存在をひとつの球体になぞらえているが、これは存在がいっさいのものを包括しているからであり、それの直知作用が外部に向かわずに、それ自体のうちに止まっているからなのである。しかし彼は、彼自身の書物のなかで、存在を一なる

ものと呼んでいるために、あたかもその一者の多なることが見出されるというので、非難を招いていたのである。しかしこの点は、プラトン対話篇のパルメニデスが、もっと厳密な論理を用いて、第一の一者を正当な意味の一、第二の一者を多なる一、第三の一者を一にしてまた多なるものという風に言い、これらを互いに区別しているのである。そしてこのようにすれば、パルメニデスその人といえども、われわれの三原理に協調し得る者となるのである。」(田中美知太郎訳) と述べているが、ここで彼が述べている第一の一者は、田中教授も指摘されておられるように、「プラトンのパルメニデス」一三七C—一四二Aに説かれているもの、第二の一者は、同じく一四二B—一五五E、そして第三の一者は、同じく一五五E—一五七Bに説かれているものを指すと考えられる。

(18) 註(17)を参照。

(19) *Γενητικὴ γὰρ ἡ τοῦ ἑνὸς φύσις οὖσα τῶν πάντων οὐδέν ἐστιν αὐτῶν. οὔτε οὖν τι οὔτε ποιὸν οὔτε ποσὸν οὔτε νοῦς οὔτε ψυχή. οὐδὲ κινούμενον οὐδ' αὖ ἑστώς, οὐκ ἐν τόπῳ, οὐκ ἐν χρόνῳ.*.....(VI. 9. 3, 40–43.)

(20) *Τὸ ἓν πάντα καὶ οὐδὲ ἕν. ἀρχὴ γὰρ πάντων οὐ πάντα, ἀλλ' ἐκείνως πάντα... πῶς οὖν ἐξ ἁπλοῦ ἑνὸς οὐδεμιᾶς ἐν τοιούτῳ φαινομένης ποικίλας, οὐ διπλόης οὕτινος ὑποστῶν; Ἢ ὅτι οὐδὲν ἦν ἐν αὐτῷ, διὰ τοῦτο ἐξ αὐτοῦ πάντα, καὶ ἵνα τὸ ὂν ᾖ, διὰ τοῦτο αὐτὸς οὐκ ὄν, γεννητὴς δὲ αὐτοῦ*....(V. 2. 1, 1–6.)

(21) *τὸ ἓν δύναμις πάντων* (V. 1. 7, 10.). *καὶ ἐκεῖνο μὲν* (*τὸ ἕν*) *δύναμις πάντων, τὸ δὲ* (*ὁ νοῦς*) *ᾔδη τὰ πάντα* (V. 4. 2, 38.) *τὸ μὲν πρώτον δύναμίς ἐστι κινήσεως καὶ στάσεως* (III. 9. 7, 1–2.).

(22) *Λεγτέον δὲ καὶ ἄπειρον αὐτὸ* (*τὸ ἕν*) *οὐ τῷ ἀδιεξιτήτῳ ἢ τοῦ μεγέθους ἢ τοῦ ἀριθμοῦ, ἀλλὰ τῷ ἀπεριλήπτῳ τῆς δυνάμεως* (VI. 9. 6, 10–11.).

(23) *Ἐπεὶ καὶ ἐν τοῖς νοητοῖς ἡ ὕλη τὸ ἄπειρον καὶ εἴη ἂν γεννηθὲν ἐκ τῆς τοῦ ἑνὸς ἀπειρίας..., οὐκ οὔσης ἐν ἐκείνῳ ἀπειρίας ἀλλὰ ποιοῦντος* (II. 4. 15, 17–20.).

(24) *Ἀλλ' οὐ νοεῖ τὸ πρῶτον ἐπέκεινα ὄντος. ὁ δὲ νοῦς τὰ ὄντα, καὶ ἔστι κίνησις ἐνταῦθα καὶ στάσις. περὶ οὐδὲν γὰρ αὐτὸ τὸ πρώτον, τὰ ἄλλα δὲ περὶ αὐτὸ ἀναπαυόμενα ἵστηκε καὶ κινεῖται. ἡ γὰρ κίνησις ἔφεσις, τὸ δὲ οὐδενὸς ἐφίεται.* (III. 9. 9, 1–4.). *Νόησις δὲ τὸ νοητὸν ὁρῶσα καὶ πρὸς τοῦτο ἐπιστραφεῖσα καὶ ἀπ' ἐκείνου οἷον ἀποτελουμένη καὶ τελειουμένη ἀόριστος μὲν αὐτὴ ὥσπερ ὄψις, ὁριζομένη δὲ ὑπὸ τοῦ νοητοῦ* (V. 4. 2, 5–7.). *Τὸ μὲν πρῶτον δύναμίς ἐστι κινήσεως καὶ στάσεως, ὥστε ἐπέκεινα τούτων. τὸ δὲ δεύτερον ἵστηκέ τε καὶ κινεῖται περὶ ἐκεῖνο. καὶ νοῦς δὲ περὶ τὸ δεύτερον. ἄλλο*

γὰρ ὂν πρὸς ἄλλο ἔχει τὴν νόησιν, τὸ δὲ ἓν νόησιν οὐκ ἔχει. διπλοῦν δὲ τὸ νοοῦν, κἂν αὐτὸν νοῇ, καὶ ἑλλιπές, ὅτι ἐν τῷ νοεῖν ἔχει τὸ εἶ, οὐκ ἐν τῇ ὑποστάσει (III. 9. 7, 1-6.).

二

これからプロチノスの中期の作品に目を移し、この時代の作品にも[25]知的素材という考えが取りいれられているのか、もし取りいれられているとしたら、すでに見てきた四つの役割のうちのどれに強調点がおかれているのかということを調べていくわけであるが、その前に、次のことに注意していただきたい。すなわち、ギャスリイらは中期以降の作品から知的素材が姿を消した理由のひとつとして、「第二論集の第五論文、第三章で、知的素材という考えはしりぞけられている[26]」と述べているが、これは事実に反するということがそれである。では、なぜ事実に反しているのか。はじめに、この問題を吟味していくことにしよう。

プロチノスはギャスリイらの指摘する論文の一章と二章で、感性界における τὸ δυνάμει と τὸ ἐνεργείᾳ の意味を説明したのち、問題の三章では次のように述べている。

「さて、下準備として、以上のことが話された。今や、その目的となることが話されねばならない。τὸ ἐνεργείᾳ は知性界ではどのような意味をもっているのか、それぞれのものは ἐνεργείᾳ μόνον であるのか、それとも ἐνέργεια でもあるのか、すべてが ἐνέργεια なのか、知性界にも τὸ δυνάμει があるのか、ということがそれである。たしかに、もし知性界に τὸ δυνάμει を内に含む素材がなく、また知性界の諸存在はどれもみな、将来、別のものになることも……他の或るものを産出することも……自分に代わって別のものを存在せしめることもないとすれば、知性界には τὸ δυνάμει が内に含まれているもの（素材）はないことになるだろう。すると或るひとが、知性界にも素材を想定している人びとにたいして、『知性界に素材があれば、そこにはまた、その素材に対応して、τὸ δυνάμει もあることにな

りはしないか』と尋ねる場合には、――というのも、たとえ異なった意味であろうと、素材があれば、諸存在の或るものは素材として、他のものはエイドスとして、また別の或るものは素材とエイドスからなるものとしてあることになるからだが、――何と答えればよいのだろうか。『知性界では、素材としてあるものもエイドスなのである。魂はエイドスだが、他のもの（＝ヌース）との関係においては素材でもあるのだから』と。これが、その答えである。すると魂は、ヌースとの関係においては τὸ δυνάμει でもあるのだろうか。いや、そうではない。ヌースは魂のエイドスで、しかもそのエイドスは後から魂へやってきたのではなく、両者を分離できるのはことばのうえだけのことにすぎない。つまり魂は二重性をもっていると考えられているので、そのような意味では素材をもっているのだが、実際には素材とエイドスはひとつのものなのである[27]」と。

この文章のどこにも、ギャスリイらの指摘する「知的素材の拒否」などという考えはみられない。ここでプロチノスは、「知性界には、感性的な素材と同じ意味での素材はない」とは言っているが、「知性界にはいかなる意味においても絶対に素材はない」とは言わず、「魂はヌースとの関係においては素材なのであって、そのような意味では知性界にも素材がある」としているのである。

それにまた、「魂がヌースとの関係で素材だとすると、その魂は τὸ δυνάμει でもあるのか」という問いにたいしては、「いや、そうではない。ヌースが魂のエイドスであるとしても、魂のエイドスと素材は一体不離の関係にあって、両者が分離するのは、ことばのうえでのことであるから」と答えているが、これも、知的素材の拒否という意味を含めた答えではない。なぜなら、プロチノスがここで言おうとしていることは、次のことだからである。

すなわち、まず感性界の事物に例をとって、考えてみることにしよう。ここにひとつの青銅があるとする。その青銅は彫像との関係で見られる時には、やがて彫像となりうる状態、つまり τὸ δυνάμει を中に秘めた素材である。しかしその青銅は、別に彫像がなくても、それだけで存在することができる。なぜなら青銅は彫像の素材であるが、彫像

は青銅のエイドスではなく、エイドスが後から素材と結合してできたもの（τὸ συναμφότερον）だからである。では、知性界の魂の場合にはどうだろうか。魂はヌースとの関係においては素材である。だが魂は青銅とは違って、ヌースとの関係なしには存在できない。なぜならヌースは魂のエイドスだからである。つまり魂は、ヌースから形をあたえられ限定されることによってはじめて存在しうるのであり、それまでは無限定なるもの（τὸ ἀόριστον）にすぎない。[28] そして、この無限定なるものとしての魂は、ヌースからの形を受容することによってのみ存在しうるのだから、「ヌースの素材」と言われ、厳密な意味での魂は、形を受容することによってのみ存在しうるのだから、「ヌースからのエイドスは、後から魂にやってきたのではない」と言われるのである。で、この場合のエイドスの受容は素材としての魂がヌースのエイドスを見るという作用（ὅρασις＝θεωρία）つまり直知作用（νόησις）によっておこなわれるのだが、直知するといっても、別にそこに時空的なへだたりがあるわけではないから、直知するものと直知されるものとの間には感性的な意味での区別はない。魂は自分自身を直知するのである。だが、もし魂が全くの「一」であれば、この直知作用は不可能となる。これが可能であるためには、たとえ感性的な意味とは同じでなくとも、やはり何らかの意味で「魂は二重性をもっていると考えられる」必要がある。すなわち魂の中には、直知するもの（＝素材）と直知されるもの（＝エイドス）の別がなければならない。したがって知性界にも、そのような意味では素材がなければならない。これが右の引用文の後半の意味なのであるから、ここでもプロチノスは、知的素材の存在を拒否してはいないのである。

なお、マーランはこれらの点を指摘して、「プロチノスはここで知的素材を想定している人たちを弁護しているが、だからと言って、彼がかつて、このような考えをもっていたと推定するのは困難である」と述べているが、[29] これは明らかに誤りである。なぜなら第三論集、第九論文の、「魂はそれ自体では、いわば ὄμβρος のごときものでなければならない。そして魂にとって、見らるべきものというのはヌースである。すなわち魂は、見る前は ἀόριστον であり、本性上 ἐκεῖνος すべく生まれているのであって、ヌースとの関係においては素材である」[30] ということばや、第五論集、

第一論文の、「一方（ヌース）は形相のごとく、他（魂）はこれを受容する素材のごとき関係にあるのである。しかし知性（ヌース）の素材となるものは、素材でも知性的であるから、美しくかつ単純で、この点はまさに、知性のごとくでなければならない[31]」ということばが示すとおり、魂をヌースとの関係において素材とする考え方は初期の作品のなかにも見られるからである。

さて、右のようにしてわれわれは、ギャスリイらの見解が誤りであることを指摘してきた。だが、もしこれが正しいとすると知的素材は、中期の作品においても、何らかの役割をはたしていることになる。では、その役割は何か。知的素材の役割というものがはっきりとした形であらわれているのは、どの作品であるか。われわれはそれに該当する作品として、中期の代表的な論文のひとつ、『自然、観照、一者について』をあげることができよう。プロチノスはこの論文の十一章で、次のように述べている。

「ヌースは ὅμμα τις であり、ὄμμα ὁρῶσα であるから、現に活動している力（δύναμις）である。したがってヌースのなかには、素材とエイドス――といっても、その素材というのは知性界にある素材のことだが――の別があることになるだろう。なぜなら現に活動している ὅρασις にも、二重性があるのだから。つまりとにかく、そのヌースは見る前には一つだったのである。したがって一つが二つになったのであり、二つは一つになるのである。さて ὅρασις の場合には感性的な対象によって充足され、いわば完成されるのであるが、ヌースの場合にはそれを充足させるものは『善』である。なぜなら、もしヌースがそれ自体で善であったなら、見るとか、あるいは要するに活動するなどということは必要なかっただろうが、実際には、そうではないのだから。つまり善以外のものは善を目的とし、目指す対象が善だからこそ、それに向かって活動するのだが、善は何も必要としないのである。それゆえ善は自分以外に何も持っていないことになる。したがって『善』と言う時には、それ以上、如何なる思惟もつけ加えるべきではない。も

し何かをつけ加えるようなことがあれば、つけ加える度合が大きければ大きいほど、善を不完全なものとしていくのだから。だから善には『直知する τὸ νοεῖν』ということも、つけ加えるべきでない。もしそうでなければ、それに善以外のものを加えて、νοῦς ἀγαθός という二つのものにしてしまうだろう。つまりヌースは善を必要とするが、善はヌースを必要としないのであって、……ヌースは善を得ると ἀγαθοειδής となり、善によって完成されるのだが、それは善からヌースへとやってきたエイドスが、ヌースを ἀγαθοειδές とするからである。……したがってヌースのなかには ἔφεσις があり、ヌースは絶えず求めて絶えず得ているのだが、善は欲し求めもしなければ――いったい何を欲し求めるのか――得てもいない。なぜなら、何も欲し求めなかったのだから。それゆえ善はヌースでもないことになる。というのも、ヌースのなかには善のエイドスにたいする ἔφεσις と σύννευσις があるからである」(32)

プロチノスはここで、ヌースを ὄψις τις と ὄψις ὁρῶσα という二つの状態をもったもの、つまり ὄψις τις の状態から ὄψις ὁρῶσα の状態へ移行していくものとして捉えている。では、なぜヌースは ὄψις τις の状態から ὄψις ὁρῶσα の状態へ移行するのか。ὄψις τις の状態にあるヌースは知的素材だけからなっていて不完全だからである。プロチノスはこの事実を、右の引用文で、感性界の ὅρασις に例をとって説明しようとした。すなわち……

ただ一つのものつまり知的素材のみからなるヌースは、何か視力のようなもの（ὄψις τις）であり、まだ閉じられているので力を発揮しえない目のようなものである。しかしそのヌースは何も見ていないわけではない。閉じられた目の働き（ὅρασις）が自己のうちなる暗闇を対象とし、それを見ているように、(33) 閉じられたヌースの働き（νόησις）も自己のうちなる暗闇、すなわちまだ善によって照らされていない無限定な知的素材を対象として、それを見ている。(34) だがそれは、無限定な知的素材だけからなっているヌースが無限定な知的素材としての自己自身を見ていることにほかならないのであるから、そのヌースの働きつまり νόησις もまた同様に無限定で、不完全なものとならざるをえない。(35) では完全な νόησις とは、そして完全なヌースとは、どのようなものか。閉ざされた目は、自らを開いて太陽の光を

受けいれ、対象を見る時に、ὁράσας の機能を十分に発揮して「現に働いている力」となり、自らを完成させる。それと同じように閉ざされたヌースも、自らを開いて善の光を受けいれ、対象（＝善）を見る時に、νόησας の機能を十分に発揮して「現に働いている力」となり、自らを完成させる。だからこの善を見ているヌース、ὅλης ὁρῶσα の状態にあるヌースこそ完全なヌースであり、まことのヌースなのである。

このようにプロチノスは、感性界の ὁράσας に例をとって知性界の νόησας を説明したのであるが、ここで彼が言おうとしていることは、要するに、「ὅλης εἰς としてのヌースは、無限定な知的素材だけからなっているので、善と違って不完全である。だからそれは完全たらんと欲して（＝ἔφεσις）善を見（＝θεωρία＝νόησις＝κίνησις）、その光すなわちエイドスを受けいれて ἀγαθοειδής となるのであって、この ἀγαθοειδής となったヌース、すなわち知的素材とエイドスからなるヌースこそまことのヌースである」ということなのであるから、ここに述べられている彼のヌース観は、ヌースの構成要素としての、そしてヌースの一者にたいする異なり・不完全・欲求・動の原理としての知的素材なしには成立しえないことになる。それにまた（註36）に例示しているように、他の中期の作品のなかにも知的素材の無規定性を前提としなければ成り立たないような教説が述べられているのであるから、プロチノスが中期の作品においても知的素材という考えを維持していたということは、何ら疑う余地のないことなのである。

なお、知的素材があるためには、前期の場合と同じように、一者の無限性がその前提として認められていなければならないわけであるが、この点についても（註36）を参照されたい。

これで一応、第二部におけるわれわれの論述は終わったことになるのであるが、ここでひとつだけ注意しておかねばならないことがある。先程の引用文の、「ヌースのなかには ἔφεσις があり、ヌースは絶えず求めて絶えず得ているのだが、善は欲し求めもしなければ得てもいない。それゆえ善はヌースでもないことになる。なぜならヌースのなかには、善のエイドスにたいする ἔφεσις と σύνεσις があるのだから」ということばからもわかるように、プロチノス

は『自然、観照、一者について』のなかで、善とヌースとの違いを不完全性や異の原理としての知的素材よりも、むしろ ἕξεσις と κίνησις の原理としてのそれに求めているが、これは彼が知的素材の動的な面を重視し、善の認識の原動力としての知的素材の役割を前面に押し出さんとしていることを示している、という事実がそれである。

彼の知的素材は、すでに見てきたように、一者の無限性の産物たる無規定性（ἀοριστία）を基礎とし、そこからさらに、不完全性や異他性などといういろいろな特性をもったものとしてあらわれ、それらの特性はまたヌースの一者にたいする欲求と動という役割を知的素材にあたえていく。つまり知的素材の役割は無規定→不完全→異他→欲求→動という発展の行程をたどるのであるから、中期の作品で欲求と動の役割が重視されていると言っても、それはほかの役割の無視や破棄を意味しているのではない。ほかの役割はすでに自明のこととして言及されなかっただけのことであり、それらの役割が前提として認められていなければ、ヌースの一者にたいする欲求や動もありえないのである。だがしかし、プロチノスがそれらの役割の重要性を認めながらも、ここで欲求と動の原理としての知的素材の役割を強調していった点に、われわれは注目しなければならない。なぜなら彼はそうすることによって、やがて知的素材に、「知への愛」の原動力としての役割をあたえていくのであるから。なお、この問題については、次の第三部で詳細に論じられるであろう。（未完）

(25) 註(6)を参照されたい。
(26) 註(5)を参照されたい。
(27) Enn. II. 5. 3, 1～18.
(28) πρώτον οὖν λεκτέον ὡς οὐ παντελῶς τὸ ἀόρατον ἀτιμαστέον, οὐδὲ ὃ ἂν ἄμορφον ᾖ τῇ ἑαυτοῦ ἐπινοίᾳ, εἰ μέλλοι παρέχειν αὐτὸ τοῖς πρὸ αὐτοῦ καὶ τοῖς ἀόρατοις. οἷόν τε καὶ ψυχὴ πρὸς νοῦν καὶ λόγον πέφυκε μορφουμένη παρὰ τούτων καὶ εἰς εἶδος βέλτιον ἀγομένη... (II. 4. 3, 1-5.). ψυχὴν γὰρ γεννᾷ νοῦς, νοῦς ὢν τέλειος. Καὶ γὰρ τέλειον ὄντα γεννᾶν ἔδει, καὶ μὴ δύναμιν οὖσαν τοσαύτην ἄγονον εἶναι. Κρεῖττον δὲ οὐχ οἷόν τε ἦν εἶναι οὐδ' ἐνταῦθα τὸ γεννώμενον, ἀλλ' ἔλλαττον

ὂν εἰδώλον εἶναι αὐτοῦ, ἀόριστον μὲν ὁσαύτως, ὁριζόμενον δὲ ὑπὸ τοῦ γεννήσαντος καὶ οἷον εἰδοποιούμενον. (V. 1. 7, 36-42.).

(29) Merlan : op. cit. 126.

(30) Enn. III. 9. 5, 1～3.

(31) ibid. V. 1. 3, 22～23. （田中美知太郎訳、『善なるもの一なるもの』より）

(32) ibid. III. 8. 11, 1～25.

(33) 「……つまり目が暗闇を見ようとして自分を光から遠ざけたものの、光を後に残して来たので見えないように――目は光と一緒では暗闇を見ることはできないのだが、逆に光なしでも見ることはできない。いやむしろその場合には『見ないことができる』と言った方が適切で、目はそのような意味で、可能な範囲内で暗闇を見ることになるのだが――……」（I・8・9）。

(34) Καὶ νοῦς εὑρίσκει τὸ ἀιτίον. οὗτος γὰρ διαιρεῖ, ἕως εἰς ἁπλοῦν ἥκῃ μηκέτι αὐτὸ ἀναλύεσθαι δυνάμενον. ἕως δὲ δύναται, χωρεῖ αὐτοῦ εἰς τὸ βάθος. Τὸ δὲ βάθος ἑκάστου ἡ ὕλη. διὸ καὶ σκοτεινὴ πᾶσα, ὅτι τὸ φῶς ὁ λόγος καὶ ὁ νοῦς λόγος. Διὸ τὸν ἐφ' ἑκάστου λόγον ὁρῶν τὸ κάτω ὡς ὑπὸ τὸ φῶς σκοτεινὸν ἤγηται, ὥσπερ ὀφθαλμὸς φωτοειδὴς ὢν πρὸς τὸ φῶς βαλὼν καὶ χρόας φῶτα ἄντα τὰ ὑπὸ τὰ χρώματα σκοτεινὰ καὶ ὅλως λέγει κεκρυμμένα τοῖς χρώμασιν. Διάφορόν γε μὴν τὸ σκοτεινὸν τό τε ἐν τοῖς νοητοῖς τό τε ἐν τοῖς αἰσθητοῖς ὑπάρχει διάφορός τε ἡ ὕλη, ὅσῳ καὶ τὸ εἶδος τὸ ἐπικείμενον ἀμφοῖν διάφορον. ἡ μὲν γὰρ θεία λαβοῦσα τὸ ὁρᾶν αὐτὴν ζωὴν ὡρισμένην καὶ νοερὰν ἔχει, ἡ δὲ ὡρισμένον μέν τι γίγνεται, οὐ μὴν ζῶν οὐδὲ νοοῦν, ἀλλὰ νεκρὸν κεκοσμημένον. (II. 4. 5, 4-18).

(35) 「ヌースのエネルゲイアは、ノエーシスである。で、このノエーシスは、ノエートンなるものを見（νόησις δὲ νοητὸν ὁρῶσα）、その方へ向きを変え、かのもの（＝善）によって完成され、完全なものとされるのだが、そのノエーシスは、いわば ὅρασις のように無限定で、ノエートンなるものによって限定される。……それゆえヌースは単一でなく、多である。すなわちヌースは複合されたものとしてあらわれ、……見ている時にはすでに多となっているのである。かくしてヌースは、それ自体で νοητὸν であるとともに νοῶν でもあるのであって、それゆえにすでに二でもある。……ノエートンなるもの（＝善）は自己自身に留まり、τό ὁρῶν や τό νοοῦν のように他を必要とすることはない。かくてかのもの（＝善）はノエートンなるものとして留まり、生じるものはノエーシスとして生じるのであって、その生じたものがノエーシスとして自分の生じてきた源を νοεῖν すると、……ヌースが生まれる。」という初期の論文（V・4・2）のことばを参照されたい。この内容は本論の引用と全く同じことを意味している。

(36)　万有を生む者としての一者の無限性については、次のことばを参照されたい。

Τί δὴ ὄν; Δύναμις τῶν πάντων. ἧς μὴ οὔσης οὐδ' ἂν τὰ πάντα, οὐδ' ἂν νοῦς ζωὴ ἡ πρώτη καὶ πᾶσα. (Ⅲ. 8. 10, 1-2.). *'Αλλ' οὐδ' ἄπειρος ὡς μέγεθος. ποῦ γὰρ ἔδει προσελθεῖν αὐτὸν ἢ ἵνα τί γένηται αὐτῷ οὐδενὸς δεομένῳ; Τὸ δ' ἄπειρον ἡ δύναμις ἔχει. οὐ γὰρ ἄλλως ποτὲ οὐδ' ἐπιλείψει, ὅπου καὶ τὰ μὴ ἐπιλείποντα δι' αὐτόν.* (Ⅴ. 5. 10, 19-24.).

知的素材の無限性を前提としていると思われる文章については、次のことばのがある。

Τοῦτο δὲ νοῦς καὶ πάντη φρόνησις. Καὶ ὡρισμένον ἄρα καὶ πεπερασμένον καὶ τῇ δυνάμει οὐδὲν ὅ τι μή, οὐδὲ τοσῆδε· ἐπιλείποι γὰρ ἄν. (Ⅲ. 6. 6, 16-19.). *"Εστι δὲ καὶ παραδείγμασι νοεροῖς χρώμενον εἰδέναι οἷόν ἐστι νοῦς, ὡς οὐκ ἀνέχεται οἷον κατὰ μονάδα μὴ ἄλλος εἶναι. ...Καὶ τὸ ἄπειρον οὕτως ἐν νῷ, ὅτι ἄν ὡς ἓν πολλά, οὐχ ὡς οἶκος εἷς, ἀλλ' ὡς λόγος πολὺς ἐν αὐτῷ,...*(Ⅵ. 7. 14, 1-12.). *Εἰ οὖν ζωὴ ἐν τούτῳ, ὁ διδοὺς ἔδωκε μὲν ζωήν, καλλίων δὲ καὶ τιμιώτερος ζωῆς. Εἶχεν οὖν ζωὴν καὶ οὐκ ἐδεῖτο ποικίλου τοῦ διδόντος, καὶ ἦν ἡ ζωὴ ἴχνος τι ἐκείνου, οὐκ ἐκείνου ζωή. προς ἐκεῖνο μὲν οὖν βλέπουσα ἀόριστος ἦν, βλέψασα δ' ἐκεῖ ὡρίζετο ἐκείνου ὅρον οὐκ ἔχοντος. Εὐθὺς γὰρ πρὸς ἕν τι ἰδοῦσα ὁρίζεται τούτῳ καὶ ἴσχει ἐν αὑτῇ ὅρον καὶ πέρας καὶ εἶδος. καὶ τὸ εἶδος ἐν τῷ μορφωθέντι, τὸ δὲ μορφῶσαν ἄμορφον ἦν. ὁ δὲ ὅρος οὐκ ἔξωθεν, οἷον μεγέθει περιτεθείς, ἀλλ' ἦν πάσης ἐκείνης τῆς ζωῆς ὁ ὅρος πολλῆς καὶ ἀπείρου οὔσης, ὡς ἂν παρὰ τοιαύτης φύσεως ἐκλαμψάσης, ζωή τε ἦν οὐ τοῦδε. ὥριστο γὰρ ἄν ὡς ἀτόμου ἤδη. 'Αλλ' ὥριστο μέντοι. ἦν ἄρα ὁρισθεῖσα ὡς ἑνός τινος πολλοῦ. "Ωριστο δὴ καὶ ἕκαστον τῶν πολλῶν, διὰ μὲν τὸ πολὺ τῆς ζωῆς πολλὰ ὁρισθέν, διὰ δε αὖ τὸν ὅρον ἕν. Τί οὖν τὸ ἓν ὡρίσθη; Νοῦς. ὁρισθεῖσα γὰρ ζωὴ νοῦς. τί δὲ τὸ πολλά; Νόες πολλοί.* (Ⅵ. 7. 17, 11-26.).

（筆者　北海道教育大学釧路分校〔哲学〕助教授）